Phèdre de Racine

村　島　実恵子

ユーリピデスとセネカの序章

古代作家達は自分の作品の概略を先ず序章で述べ，次いで起るべき事柄の説明の為に或る種の神聖さを舞台で表現させようと試みている。

ユーリピデスに於ては

愛の女神アフロディーテがまず登場して述べる：彼女は自分の為の祭祀を拒否したイポリットの自尊心に復讐する事に決めたと告げる，そして彼女は女王フェードルを利用して，義理の息子イポリットに邪恋の情熱を起させる。

セネカに於ては

ここでは女王フェードルの人物は時代遅れに描かれている。イポリットが先ず述べる，彼は自分の仲間と対話をする，そして狩の準備をし，狩猟と清純の女神であるディアンヌに犠牲を捧げると告げる。

ラシーヌの作品では，この二つの原典の序章が充分に識別出来ない程かえられている。ラシーヌに於てはイポリットが先ずそれ迄の出来事を述べ乍ら悲劇の中に観客を導いて行くのである。

第Ⅰ幕

これは〝告白の場面〟とても題名されよう，義理の息子イポリット，次いで女王フェードルが自分達の乳母に心の問題を告白しているからである。今しもイポリットはトレゼースの宮殿を立ち去ろうとしている。彼の父国王テゼーの失踪を探しに出かけると云う事を口実にするが，賢明な乳母テラメーヌに心を見抜かれ，イポリットが心を寄せているアリシから去る為であると云うことを告白する。この場面は観客に彼の悲劇を興味あるも

のに導かせる。テラメーヌにイポリットが心の中を告白したのは，女王フェードルが乳母オーノンヌに告白する前の出来事である。戦いで生死不明となった国王テゼーを探しに方々に人が送られていたが無駄であった。

乳母テラメーヌはイポリットを国王の妻フェードルの犠牲にさせないように宮殿から立ち去らせようとイポリットを勇気づける。(観客はここで女王フェードルが彼女の義理の息子，イポリットを迫害している事が分る。)フェードルはずっと後に彼女の心を知らせる，それはフェードルが義理の息子イポリットに思いを寄せていたこと，心とは反対にことごとく彼につらくあたり，彼を遠ざけていたことを観客は知るのである。

テラメーヌは王子イポリットが愛するアリシ姫の為に逃亡を望んでいることを知る。イポリットは自分の性格の不柔断さを悔いていた。アリシ姫は国王テゼーのいとこであるパランテットの妹であり，そのいとこ達はアテネ国王の王冠を彼から奪わんものと陰謀を企てていた。その事が露見してアリシ姫はテゼーのもとで囚われの身になっていたのである。

イポリットに思いを寄せる事を妨害されたフェードルは心の病いと苦悩から，宮殿の外の空気を吸いに出て，オーノンヌに自分をこの宮殿の外に逃がせてくれる様に頼み込む。驚いたオーノンヌは女王フェードルの心の中に秘められている苦しみを感じとり，彼女に心を苦しませる秘密を打ち明けて欲しいと云う。しかしフェードルは打ち明けることを拒否し，耐えようとする，秘密を打ち明けないフェードルにオーノンヌは自らの命を断ちかねない様子を示したことで，フェードルも負け，彼女の心の悩みであるイポリットに思いを寄せている事を打ち明ける。

ラシーヌの悲劇の主要場面はユーリピデスに負う処が多い。第一幕の終りでは，観客は国王テゼーの戦死を知らされる。ラシーヌの新しい創造として：二人の主人公はこのことで自分達の束縛から解放されたことになる。フェードルにとって，彼女の情熱は人の云う様な不倫の情熱ではないと云うことになったのである。イポリットは義理の息子であり，女王フェードルはすでに未亡人となったのであり，義理の息子イポリットと結婚出来る状況にある事が観客に知らされる。一方王子イポリットにとって彼の父国王の名誉を傷つけることなくアリシ姫に彼の気持を打ちあけることが出来る状況にある事が知らされる。

第II幕

イポリットはアリシに会う。彼は彼女に告白する事をためらう。しかし時は迫って来ている，イポリットがアリシに向って自分の気持を抑制出来ずに卒直に愛の告白をする。その言葉は珠玉である。アリシはイポリットの言葉に満足している事が観客に分る。劇のこの段階では彼女は気取り屋で虚栄心の強い女性として描かれているからである。又この場面はフェードルとイポリットが出会うカタストロフの準備をしていることにもなる。

フェードルはいつもイポリットに対する情熱をそれ迄は恥じていた。フェードルは今こそここで彼女の子供達について，又王位継承権について彼に話そうとする。テゼーの戦死により，フェードル，イポリット，女王の子供達に王位継承権があるのである。フェードルの心を占め重くのしかかる彼女の情熱が彼女を悩ませている。セネカにみられるように王位継承権について語り乍ら，彼女はテゼーの息子を思い描き，彼女が義理の息子に告げようとする自分の情熱を思い起すのである。フェードルはそこで今迄彼に抱いて来た彼女の愛情を告げる時が来たことを感じる。しかしイポリットはこの話に不快になる。フェードルは自分の愛情を恥ずかしそうに，苦悩に打ちひしがれた様子で語る，彼に答えを求めてはいないかのように。

ここでラシーヌはフェードルに起る運命の激しさを表現しようとしている。悲劇のきびしい〝時〟はセネカに強く影響を受けている。

ユーリピデスでは

ここではオーノンヌがイニシアティヴをとり，イポリットに女王フェードルの愛情をうちあけている。これによってイポリットとフェードルは残酷な運命へと導かれて行くことになる。

セネカでは

フェードルが自分の愛をイポリットに告白する。驚き，怒りのあまり，イポリットはフェードルの許に自分の剣を忘れて立ち去る。ラシーヌはこれにヒントを得て全てを書き改めている。

第III幕

イポリットに愛を告白し，彼の怒りをうけたフェードルは以前にもまして不幸であった。何故ならば，イポリットは，はっきりとフェードルの愛を拒否したからである。舞台では万事好都合には進行して行かない。それは国王テゼーの戦死は誤報であり，宮殿に帰って来る。この帰国の知らせ

は827行目に表現されている。まさにラシーヌの悲劇詩の真中になるからである。(827行×2＝1654行)そして全てがどんでん返しに導いて行かれるのである。全てがここで問題になって来るのである。フェードルにとっては，義理の息子イポリットが父国王に全てを告げに行くのではないかと云う危険に陥る。

オーノンヌはどんな犠牲を払っても女王フェードルを死に至らしめないようにと考えをめぐらす，そして先廻りを試みる。そしてイポリットを知性のない，むしろ動物のような精神の持ち主であるとする，そして彼女はフェードルにそのようにテゼーのもとに全てを話に行かせようとする。フェードルは一瞬ちゅうちょする。彼女は義理の息子を罪に陥らせたくもない，又オーノンヌがイポリットを非難する事も望まない。国王テゼーと一緒に現れたイポリットを見てフェードルは気を失い，オーノンヌに手紙を渡す。それにはオーノンヌからイポリットに自分の過ちを許してくれるように話して欲しいと書いてあった。しかしオーノンヌはフェードルがイポリットの為に死ぬような事丈はさせたくなく，そのことを彼女の胸の中にとどめておく事にした。

ユーリピデスでは

フェードルは彼女の告白のあとでイポリットが怨り叫ぶのをきく。乳母を呼びにやり，自分は絶望と恥ずかしさの故に死を選ぶ。テゼーが帰り，死んだフェードルを発見し，イポリットを告発する手紙を彼女の掌中に発見する。

セネカでは

オノンヌは帰国したばかりのテゼーのもとにイポリットを告発しに行く。その証拠として若い王子がフェードルの所に置き忘れた剣を見せる。この剣で女王をおどしたと証言する。セネカに於てはフェードルは言葉も動作も平凡な女性として描かれており，ユーリピデスではイポリットが女性に対して毒舌を浴びせると云う通俗さで描かれている。

ラシーヌに於ては，イポリットは女王フェードルの名誉を守ろうとする描き方がされている。ニュアンスはフェードルとテゼーに不快感を与える事であるが，彼等の身分地位を守る秩序を登場人物に与えていることである。ラシーヌは当時の貴族を尊敬していたと云う心遣いが感じられる。登場人物が不名誉にならないような配慮をしている。ラシーヌはまたポー

ル・ロワイヤル時代の旧師達に対する礼儀もつくしていることである，それは自分の作品を彼等に献じて今迄のわだかまりを和解しようと云う意図もあったと思われる。これは Drefus-Brissac の云う〝芸術の無力〟ではなく，これはむしろセネカに於けるフェードルやユーリピデスに於けるイポリットの通俗性を少なくしようとしたと思われる。特に女性に対する毒舌を少なくさせていると云う点で。

舞台に話を戻すと，テゼーとイポリットが話し合っている。その話題はフェードルが心配していたようなものではなく，イポリットは父国王に女王と離れて暮すことのないように，又宮殿を去ることのないようにと頼んでいたのであった。それは国王テゼーが出発前にイポリットに宮殿の管理，女王の保護，王の囚われ人であるアリシ姫を監視するように命じていたからである。

さて国王が帰った今，イポリットは彼の希望も理解されたと考え，そして遠くの地に戦いに行きたいと申し出る。驚いたテゼーは，最初彼の不在中に何か政治的な陰謀がとり交わされたのではないかと考える。宮殿に入り，彼はフェードルに訊ねる。心配したイポリットは乳母テラメーヌと残る。彼はフェードルが自分を告発するのではないかと懼れたのであった。そしてイポリットはアリシ姫に対する彼の愛を話すことで自分の無実を証明しようと考えた。

第Ⅳ幕

オーノンヌがテゼーと話している。彼女はフェードルを守ること丈を考え，イポリットを早く捕えさせようとする。彼の罪を告発する為に彼女はイポリットがフェードルの部屋に置き忘れて行った剣を見せ，この為フェードルがとても困惑していると話す。テゼーは我を忘れて怒る。オーノンヌは国王に対する敬意から女王フェードルは義理の息子を告発しなかったと申し述べる。その為フェードルは死を選ぼうとしたと迄も。怒りたけったテゼーは息子イポリットを呼び戻させる。彼は父国王に自分が愛しているのはアリシ姫であると云う、彼には父国王の激怒が理解出来ない。王は自分の息子に悔辱されていると感じる。悪口を並べたて息子イポリットを宮殿から追放して了う。観客はここで国王が息子イポリットを海神 Neptune に殺させようとしている事が分る。この激しさは常に貴族の言葉の中に語られ、古典のわくのままである。イポリットは不器用に自分を弁

護する，即ちフェードルに愛の告白はしなかったと云うこと，女王フェードルを罪におとし入れる気はないこと，彼は尚も女王の疑いから父国王の眼をさまさせようとする。それでもテゼーはイポリットを責め続ける。只一度，彼は自分の行為に反省することがあった。 Neptune の怪力でイポリットを倒させた後であるがそれは遅すぎたのである。

フェードルは乳母がとった行為に驚愕していた。彼女は夫国王に会い，全てを彼に話す，イポリットのことについても話す。夫テゼーは彼女にイポリットは死を免れないと云う。フェードルの苦悩の前に，又，彼女はイポリットに何の復讐も望んでいないと云う話にテゼーは驚き，彼が息子イポリットと話した事を詳述する。観客はテゼーの言動の中に，フェードルの言葉によっても考えを改めない性格的に非常に強いものがある事をうかがい知る。しかし彼の動作はどちらかと云えば或るナイーヴさが表われている。彼はフェードルに，イポリットはアリシを愛していたと云うイポリットの言葉を告げる。

フェードルはその言葉に打ちのめされる。彼女にとって，イポリットが他の女性を愛していたと云う語はナイフで自分の胸を突き刺されたような気になった。夫テゼーは妻の驚きが理解出来ない。フェードルは嫉妬する，この嫉妬心は罪もないこの恋人達に憎悪の念を抱かせる事になる。彼女は過去を探り，二人の事を想像し，それに耐えられなくなる。フェードルは自分の気を鎮める為にはアリシも死なせざるを得ないと，ここで観客はテゼーに申し開きをする為に声にもならなかったフェードルの独白で知るのである。彼女はその為にこそイポリットが罪ある者として死に価すると感じた。劇の進行は観客に，息子の罪状を糾明する為の調査を行わなかったテゼーの弱さを示す。彼はオーノンヌがイポリットを罪に陥し入れようとした話丈で納得した事になる。

ユーリピデスでは

テゼーは激高の余り，海神ポセイドンを呼び息子を殺すように願った。イポリットは身の証しの為に無益な試みをする。

セネカでは

ユーリピヴスと同栃海神ネプチューンを呼ぶ。イポリットも同栃無益な身の証しをする。(セネカとラシーヌではネプチューンはギリシアの海神である)

第V幕

馬車で宮殿を追放されたイポリットは途中海から浮び上った怪物に出会う。その怪物は馬を狂気のようにさせ，馬車の金具はこわされ彼もろとも岩に叩きつけられた。ラシーヌはイポリットの死の描写を可成り長く語りすぎると言われている（しかしヴォルテールは彼を弁護している）海神の描写は今日の我々にとっては少し滑稽にみえる。ラシーヌは Metamorphose の物語に影響を受けていると思われる。（注1）

Drefus-Brissac によると〝ユーリピデスは彼の作品ではイポリットを主人公にしており，劇の主要場面に登場させている，セネカとラシーヌに於てはフェードルが主におかれている〟。

ユーリピデス（セネカ次いでラシーヌ）

テゼーが呟く呪いの言葉はすぐに成就する。イポリットは強引に追放され，都を立ち去り，海神に身を亡ぼされる。ユーリピデスは序章と同じ手法を終章でも用いている。終章ではライバルの女神が最初の陰謀を述べに登場する。真実をあかさなければならなかったこと，イポリットが無実であることを述べねばならなかった。彼の劇では，フェードルはテゼーの帰国前死んで了った。その真実は神託によるものであり，イポリットは忠実な人として描かれている。舞台に血にまみれたイポリットを登場させる行為に或る恐怖が漂よう。それはラシーヌの時代の人には受け入れ難かったことであろう。

セネカに於てはこの恐怖はフェードルが死に直面しているイポリットを悔辱する為に舞台に登場させる事で倍加されている。そして後彼女は自ら死ぬ。彼の作品ではテゼーのもとに寸断された息子の屍体が運んで来られる。これはセネカの時代では相応しい行為であり，今日ではひどい悪趣味になっている。

ユーリピデス

事故の知らせにテゼーは死にひんした息子を運んで来るように命じる。女神アルテミス（デイアンヌ）はテゼーにイポリットの無実を知らせに，アフロデイテ（ヴィーナス）の陰謀で女王フェードルも同時に失う事を知らせに登場する。テゼーに許されたイポリットは彼を慰め乍ら息を引きとる。

セネカ

恐ろしい事故とイポリットの死を知ったフェードルはテゼーに息子の無実を打ち明け，彼女丈が悪かった事を告白する。そして彼女は天国で彼と一緒になるとイポリットの剣で死んで行く。テゼーはイポリットの屍体を運んで来させる。

最後にラシーヌに於てはフェードルはひどく静かにしかも重々しく話し出す，それは神々の犠牲者としての身の処し方である。彼女の家族の一人に夢中にさせられたヴィーナスに対する恨みであり，観客に情状酌量の気持を起させるのであった。そして彼女は自ら毒を仰ぐのである。

劇が正しい結末を得る為に，全登場人物に夫々の運命が用意されている。イポリットは死に，フェードルも死に，オーノンも自ら死を選び，舞台にはテゼーとアリシが残る，これはラシーヌの創造であり，彼はテゼーにアリシと未来を与える，アリシはテゼーの娘となり，イポリットの再現と追憶の人になる。

フェードルに呪われて追放されたオーノンスの運命については彼女は海に身を投じる事になる。ユーリピデスやセネカに於ては，オーノンヌは結末の為に二次的に扱われすぎている，彼女は召し使いとして或いは奴隷の如くにみなされている。そして単純に忘れ去られている。セネカやユーリピデスの悲劇では主要人物や貴族達の運命丈が重要視されていた事が分かる。

フェードルの複雑な性格は他の登場人物達の性格を色あせさせて見せる。ラシーヌに描かれたヒロインは当時の観客には身近で興味ある生き生きとした姿にみえていたように思われる。この点ではラシーヌのフェードルはそれ迄とは異った手法で描かれた事になる。アンドロマクに於ては4人のヒロイン達が皆同じ様な描き方しかされていない。ブリタニキュスではアグリピーヌとネロンは精彩を放って描かれている。

フェードルに於ては劇構成上，個々の人物の心理描写もフエードルの動きに従っている丈である。登上人物の起源を辿って行くと神話でそれらの人物達が出会った不幸や悩みに源を発しているように思われる。

J. Fable はこの事について書いている，〝神話に描かれたフェードルは劇作家の夢想によって生れたものではなく，詩人考古学者としての夢想がラシーヌを馳り立てたのに相違ない，フェードルの神は彼女自身の中に，又

心の中にしか存在しない。彼女が感じる恐怖感，権力失堕，責任感が彼女をとりまく運命に抗わせようとしている″（注２）

ユーリピデスの序章で私達は礼拝する事を拒否したイポリットに復讐しようとするアフロディテ（ヴィーナス）を見た，その為にアフロディテは女王フェードルに仕えたのである。終章ではライバルの女神アルテミス（ディアンヌ）がテゼーに真実を告げに，イポリットに罪はないと云いに来る。ユーリピデスは当時の寓話をこわさないようにしながら当時の劇を支配していた迷信を除去しようとしている。

セネカはラシーヌが取り入れたようにすでにヴィーナスの犠牲者のイメージをかなり修正している。即ち彼の戯曲はユーリピデスとラシーヌの戯曲の中継点とも云えよう。

注１　（ＸＶ，504～540）.

注２　Thezramezne ou les Iimites de Racines

参考文献

Racine : Phe'dre.
P. (ROUZET : Tout Racine, a Port-Royal.
P.G. (HAMEIX : Phe'dre et le theatre.
R. PICARD : La carriere de Jean Racine d'apres des do wments contem porains.
H. LYONNET : Les Premieres de Jean Racine.
CH. DEDEYAN : Racine et sa "Phedre".

訂正：前号第11号 Phe'dre et Hippolyte の二頁目12行目ユーリピデスの〝王女 Hippolyte". は〝王子 Hippolyte″ に訂正。